

野光雅らは専ら新興大和絵会のみならず作品を発表しながら研鑽を重ねた。なお、本書第二巻の校友会文学部、アブサント会、行樹社などの項に名前が頻繁に登場する川路柳虹は上記の月報記事にもあるとおり同会顧問であったが、彼は同会について次のように解説している。

新興大和繪會は松岡映丘のかつて示した大和繪の現代化の道を本道として進まんとする少壯畫家の一團で、一つの主義を捧持し、それを忠實に實現しようとする點に於ては、小團體中最も意義ある會である。これには顧問とし松岡映丘と共に、筆者自身も關與してゐるので批判の立場から見ても、或は誤解を受けやすい位置にゐるかも知れぬが、同好同趣といふでもなく、單なる門下生の畫塾的團體でもなく、それらとは別に獨立した主張あるといふことに於ては兎も角一つの特徴ある團體であることは斷言しうらと思ふ。會員は現在、岩田正己<sup>(己)</sup>、遠藤教三、穴山義平、狩野政次郎、山口三郎、高木保之助の六人であるが、みな最近の東京美術學校の卒業である。これらの人々の制作は各自に一つの特徴はもつてゐるが、その出發の基調に於て日本畫の源流としての倭繪に根據をもち、その描法賦彩を今日の理智的觀察から新たに改變しようとすることに於て一致し、所謂漫然たる西洋畫法の採擇には立つてゐないものである。群綠本位の賦彩法や風景畫本位的になる傾向やが未だ多少單調な感じは與へてもこの點に確信をもつて出立してゐることに於て前途に充分望みを囑しうらと思ふ。〔下略〕

〔現代日本美術界〕大正十四年、中央美術社)

## ⑫ 日本画科生徒の帝展出品制限

大正十年六月、日本画科教官會議において同科生徒の帝展出品を制限するために次のような決定がなされた。

帝国美術院展覽會出品ニ関スル揭示案

帝展出品ニ関スル注意

當科生徒ニシテ右展覽會ニ出品スル者ハ卒業期、第四年級生徒ニ限り差許スコト

大正十年六月十四日 日本画科

理由

例年各学生ニ亘リ右出品製作ニ没頭スル者多ク為メニ九月始業後出席者少ク且又偶々右展覽會ニ入撰スル者アルモ為メニ慢心ヲ生ジ易ク其后ノ修業上甚面白カラザル結果ヲ生ズルコトアルガ為メニシテ嚮キニ教官會議ノ上決定ス

大正十年六月十五日 東京美術學校日本畫科

右取扱 山田 廉

これについて『書画骨董雜誌』第百五十九号(同年九月)は、同科主任教授川合玉堂の、一、二、三年生はまだ基礎教育期間であるから帝展出品は百害あつて一利なく、そのため出品を禁止したという談話を報じている。